

近代日本の作家たち

小田切 秀雄

法政大学出版局

著者紹介

小田切 秀雄 (おだぎり ひでお)

1916年、東京に生まれる。1941年、法政大学文学部国文学科卒業、翌年同大学講師となる。1945年、『近代文学』の創刊ならびに新日本文学会の結成に参加。1953年より日本近代文学研究所を主宰。現在法政大学文学部教授。主著に『小田切秀雄著作集』（全七巻、法政大学出版局）をはじめ多数がある。

近代日本の作家たち

1973年 5月20日

新装版第1刷発行

著者 小田切 秀雄



発行所 財団法人 法政大学出版局

〒106/東京都港区南麻布2-8-4

電話453-0717/振替・東京95814

印刷・三和印刷/製本・鈴木製本所

定価はケースに表示してあります

© Hideo Odagiri

1091-90011-7710

合冊増補版のはじめに

この本は、一九五四年四月に厚文社から正・続二冊として出た『近代日本の作家たち』の合冊増補版である。わたしは一九三九年ごろからものを書きはじめていたが、五四年までの約一五年間に書いたもののうちから、作家論だけを集めてこの本をつくった。こんど合冊本を出すにあたり、そのごに書いた作家論のうちから多少とも本書のおぎないとなるようなもの数篇をえらんで増補した。巻末に加えたものがそれである。

本書の初版が出たころの厚文社は、創業まもない活気にみちた時期で、武田泰淳や吉野源三郎や片岡良一の本を次々と出していた。本書も数版を重ねたが、そのご同社は社運傾き、出版活動そのものを停止した。本書はやがて古書店の棚からさえ姿を消してすでに久しい。そのかん他社から再刊の申入れもあったが、厚文社主古明地慶久氏は同社再起のさいに本書の新版を出したいと熱心に希望しておられたので、いままで待っていたのである。しかし再起はまだだいぶさきということが明らかになったので、話し合いの上、法政大学出版局からの再刊申入れに従うことにした。いくらか不幸な時期をもったこの本が、わたしの大学の出版局の蔵版となるのは、わたしにとつてうれしい。

こんど、本書所収の作家論の全部を久しぶりで読みかえしてみたが、訂正加筆ということはわたしには不

可能なことがわかった。出来ばえはともかく、わたしは何か強いモチーフがないと作家論を書くことができないたちなので、あとになって部分的に書きなおすということがむづかしいのである。個々の作家論の背後にあるわたしの文学史的な展望・文学史像には段階的な変化があり、それに伴って作家論にも訂正や加筆が必要になるわけなのだが、こんど読みかえしたかぎりではそれほどの必要も感じなかった。必要はあるのだが実際には不可能だといった方がいいかも知れない。作家および作家論の相対的な独立性ということでもあろう。

個々の作家論に対応する日本近代文学史全体の展望は、昨年の晩秋に東洋経済新報社の『日本現代史大系』の一冊として書きおろした『文学史』のなかにやや立入って述べてある。本書はこの『文学史』のための基礎的作業の一つであったともいえるが、『文学史』では個々の作家・作品についてはくわしく論じられなかったので、本書はいわばあい補う関係にあるともいえる。興味をもたれたかたは同書を参照して頂きたい。この新版が出るにあたり、法政大学出版局編集部の稲義人氏にこまかい点までいろいろと世話になった。初版の時に世話になった田所実氏の名とともに、しるして記念とする。

一九六二年三月三日

小田切 秀雄

目次

合冊増補版のはじめに

| | |
|-------|-----|
| 坪内逍遙 | 1 |
| 北村透谷 | 14 |
| 内田魯庵 | 50 |
| 与謝野晶子 | 74 |
| 森鷗外 | 96 |
| 夏目漱石 | 147 |
| 二葉亭四迷 | 180 |
| 徳田秋声 | 193 |
| 正宗白鳥 | 219 |
| 永井荷風 | 237 |
| 伊藤左千夫 | 255 |

| | |
|-------|-----|
| 齋藤茂吉 | 277 |
| 高村光太郎 | 289 |
| 石川啄木 | 316 |
| 志賀直哉 | 330 |
| 芥川龍之介 | 347 |
| 小林秀雄 | 351 |
| 河上徹太郎 | 390 |
| 中村草田男 | 403 |
| 丹羽文雄 | 414 |
| 石川達三 | 425 |
| 小林多喜二 | 441 |
| 蔵原惟人 | 495 |
| 中野重治 | 503 |

太宰治……………513

戦後の作家たち……………527

田中英光・原民喜……………542

宮本百合子……………547

伊藤整……………567

野間宏……………572

高山樗牛……………592

—ナショナリズムと近代的自我—

木下尚江・大塚甲山・平沢計七

1 木下尚江……………604

2 大塚甲山……………609

3 平沢計七……………618

長塚節……………622

横光利一……………636

—昭和文学再検討の視点—

坪内逍遙

——「小説神髓」の問題——

一

「我國の文明、其趣の異なる所は特に權力の偏重に就て見る可し」、「日本にて權力の偏重なるは殆ねく其人間交際の中に浸潤して至らざる所なし、此偏重は交際の至大なるものより至小なるものに及び、男女の交際あれば男女權力の偏重あり、親子の交際あれば親子權力の偏重あり、兄弟の交際にも是あり、長幼の交際にも是あり、師弟、主従、貧富、貴賤、新參故參、本家末家、何れも皆其間に權力の偏重を存し、大藩小藩、本山末寺、本社末社、苟も人間の交際あれば必ず其權力に偏重あらざるなし、政府の中にも官吏の地位階級に従て此偏重あること最も甚し、政府の吏人が平民に對して威を振ふ趣を見れば權あるに似たれども、此吏人が政府中に在て上級の者に對するときは其抑壓を受ること甚しきものあり、地方の下役等が村の名主共を呼出して事を談ずるときは其傲慢厭ふ可きが如くなれども、此下役が長官に接する有様を見れば亦慙笑に堪たり、名主が下役に逢ふて無理に叱らる模様は氣の毒なれども、村に歸て小前の者を無理に叱る有様を見れば亦惡む可し、甲は乙に壓せられ、乙は丙に壓せられ、強壓抑制の循環窮極あることなし」〔文明論之概略〕

これはいうまでもなく、福澤諭吉の文章である。福澤の封建的人間關係に對するこのようなラジカルな批判は、「古人は疑の心を以て人間惡徳の一個條に計へ込みたれども今日の文明は全く天地間の事物に疑を容れたるに依て達し得たるものなり」〔福澤全集〕一〇、「疑心と惑溺」、「人間交際に就ては猜疑嫉妬の心深しと雖ども事物の理を談ずるときには疑を發して不審を質すの勇なし、これを半開と名く、未だ文明に達せざるなり」〔文明論之概略〕、「習慣に従ふものを理と稱す可らず、之に違ふものを邪惡とす可らず」〔明治八年三田集會所發會祝詞〕等々といふことばで内面化されもするが、この内面化は、「第一、各の身體の自由、第二、各の智恵思考の自由、第三、各の感情欲望幸福の自由、第四、各の至誠良心信念の自由、第五、各の意志の自由、以上五の者は人に缺く可らざる性質にして此各性質の自由を以て獨立を爲すものなり」〔學問のすめ〕といふ主張の先に、ただちに「先づ有形の獨立を得るに非ざれば無形の獨立は遂に望なきことを知る可し」〔福翁百餘話〕中の「人生の獨立」とする限定が出て來てしまふような仕方でも未成熟のままにとどめられていた。近代精神の内面化における啓蒙期のこの限界性は、後年北村透谷が「有形の獨立」のものはや望み得なくなつた自由民權運動挫折後の時代のなかから、せめて「無形の獨立」の世界とその權威とを自ら創り出そうとして辛苦したそのかなしさと、いわば裏と表の關係で近代日本の出發を規制していたのであつた。じじつ透谷が「明治文學管見」その他で福澤の攻撃を行うときにこの矛盾は最も鋭い形でむき出される。

ところで、この稿で取上げようとするのは坪内逍遙の「小説神髓」である。從來、日本近代文學の第一歩を形成したものとして、その歴史的意義を高く評價されてきたこの「寫實主義マニフェスト」をもう一度吟味してみることがここでの問題である。「小説神髓」は從來のような評價に堪え得るか？ 近代文學の第一

歩としてのどれだけの内容を實質上それは持つているか？ はじめに福澤を引用して透谷と對照せしめたのは、「小説神髓」がどれだけの近代的内容をもっているかを明らかにするための一應の準備にほかならなかつた。なお「小説神髓」は、二葉亭四迷の「小説總論」との比較において検討を進めることが必要であるが、それは他の機會に譲るとしてここでは、もつぱら逍遙の理論をとりあげることにする。

「小説神髓」が書かれたのは明治一八年であつたが、もちろんこれ以前にも若干の準備的な業績が逍遙自身の手によつても他の啓蒙家たちの手によつても積み重ねられていたことはいうまでもない。西周の「知說」による文學の本質・種類の簡単な紹介（明治七年）をはじめとして、本間久雄が「明治文學史」（東京堂）の上巻（昭和二年）の第二篇第一章の「『小説神髓』以前の文學論」の項で詳細に説明しているような諸種の文學論がこれに當る。これらはそれぞれの仕方で近代の文學觀念の準備となつたものではあつたが、内發的な近代精神——人間のなめざめとその要求に發した新しい内容によつて支えられていないために、いずれも單なる紹介或いは危うげな初歩的説明に終つていた。それらの積み重ねのさきに出て來た「小説神髓」はたしかに劃期的な發展を示すものではあつたが、それが右のような内的支えをどれだけ持つようになつたかという點にはあらためて検討を要するものがある。この點が「小説神髓」の再検討の中心的問題となるが、以下、この理論の中心となつている二つのもの——文學の獨立についての要求と寫實主義の提唱とを検討しながらその達成内容と制約とを見て行こう。

文學の獨立について——

逍遙はまず西歐文學に對してのおぼろげな知識からして、文學の近代的自立——何かの媒介・手段としてでなく、それ自身において獨自の意義を人間生活の内面に主張し得べきものとしての文學の意義を漠然とながら差出したのであつた。封建の世の儒教的勸善懲惡の觀念がなお文學の世界をかたくいましめていたときに、文學の獨立についてのこの逍遙の主張は一つの新しい意味——勸善懲惡の觀念の支配からの脱却を以て文學を新しい内容の形成に向つて開け放つ可能をつくり出したのであつた。もはや文學は封建的支配觀念の具となることによつて自らの存在理由を辯明する必要がなくなると同時に、支配觀念の美辭麗句をかりて自らの無内容を合理化することもできなくなつた。「小説神髓」はこのようにして日本近代文學の成立に道を開いたのであつたが、さてそのようにして形式上獨立させられた文學のその内容たるべきもの、さらには文學を獨立させねばならぬとするその内的必然そのものは、逍遙にあつては甚しく漠然としたものであり、いわば一つの借り着に過ぎなかつた。このことは、「小説の主腦は人情なり」とする逍遙のその「人情」の把握の仕方になかにうちけしがたい明瞭さで現れている。

「小説の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものをいふや。曰く、人情とは人の情慾にて、所謂百八煩惱是れなり。それ人間は情慾の動物なるから、いかなる賢人、善者なりとて、

未だ情慾を有ぬは稀れなり。賢不肖の辨別なく、必ず情慾を抱けるものから、賢人の少人に異る所以、善人の悪人に異なる所以は、一に道理の力を以て若しくは良心の力に頼りて情慾を抑へ制め、煩惱の犬を攘ふに因るのみ。されども智力大いに進みて、氣格高尚なる人に在りては、常に劣情を包み、苟にも其外面に顯さざれば、さながら其人煩惱をば全く脱せしごとくなれども、彼れまた有情の人たるからには、などて情慾のなからざるべき。哀みても亂るゝことなく、樂みても荒むことなく、能くその節を守るのみか、忿るべきをも敢て忿らず、怨むべきをも怨まざるはもと情慾の薄きにあらず、其道理力の強きが故なり。」

「小説の主眼」という部分から引用したこの一節は、一見後年の自然主義文學における人間把握に通じるように見えながら、「善人」と「悪人」という場合のその「善」と「悪」、何を「善」とし、何を「悪」とするかの規準においては近代性をいささかもたず、「人情」についてもそれを「煩惱」として把握する舊觀念の拘束のままに單に「攘う」べき「犬」として否定的に理解する——このような古めかしさは、二葉亭四迷の「浮雲」（明治二〇年）に示されたような人間觀、また透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」・「内部生命論」（二五・六年）の近代的人間の内的な把握と比較するとき、「小説神髓」の近代文學以前の實質を明らかにしないではない。近代人間はまだここでは新たな像を結ぶに至っていない。これと關連して逍遙が本居宣長の文學論にいちじるしく引きつけられているところが、右の本間が賞讃しているばかりでなく長谷川如是閑なども（昭和一四年の「日本評論」一〇月號）拍手を送っているが、それは逍遙なりの遺産繼承であると同時にかれ自身の曖昧さを示すものにほかならぬ。「小説神髓」の中に引いて逍遙が論據の一つとしてい

る宣長の「玉の小櫛」の一節を寫し取つて見る。

「さて物語は物のあはれを知るを旨としたるに、其すぢにいたりては儒佛の教へに背けることも多きぞかし。そはまづ人の情の物に感ずる事には善惡邪正さま／＼ある中に、道理にたがへる事には感ずまじきわざなれども、情は我れながら我が心にも任せぬことありて、おのづから忍びがたきふし有て感ずることもあるものなり、源氏の君の上にていはゞ、空蟬の君、隴月夜の君、藤つぼの中宮などに心をかけて逢ひたまへるは、儒佛などの道にていはむに、世に上もなきいみじき不義惡行なれば、外にいかりの善き事あらむにても善人よきひととはいひがたかるべきに、其不義惡行なるよしをばさしもたてゝ言はずして、只そのあひだのものゝあはれの深きかたを返す／＼かきのべて、源氏の君をば主ぬしと善人よきひとの本として、善事のかぎりを此君の上にとりあつめたる、是物語の主旨おほむねにして、其よしあしきは儒佛などの書の善惡かほと差異ちがひあるけぢめなり。」

見られるように、宣長は儒教的封建觀念からの人間感情の解放を主張はしているが、それが「ものゝあはれ」のきわめて制限的なものであつて、近代的人間觀に至るにはまだまだ道遠いものであることは、宣長の業績の全體としての性格を見るまでもなく疑いを容れぬところであらう。

ところで「人情」(「とものゝあはれ」)の主張は、それがまさに描かれるに値するものだといふ自覺からしてその表現にふさわしい新しい文學的方法への關心に進む。逍遙の寫實主義理論はこのようにして出て来る。しかし、「人情」についての曖昧な把握がこの場合も寫實主義理論をみじめに制約していることはいふまでもない。

寫實主義の提唱について——

さきに「小説の主眼」から引用したが、その引用文の冒頭には「小説の主眼は人情なり、世態風俗これに次ぐ。」ということばがあり、それに續く部分は「人情」と逍遙が呼ぶものの概念規定であつたが、そのような規定における「人情」はまた次のような文學的方法において描き出さるべきであることを彼は主張する。

「それ稗官者流は心理學者のごとし。宜しく心理學の道理に基づき、其人物をば假作つくりるべきなり。苟かにもおのれが意匠を以て、強しひて人情に悖へ戻せる、否、心理學の理に戻れる人物などを假作つくりりいざさば、其人物は已に既に人間世界の者にあらず、作者が想像の人物なるから、其脚色きゃくしやくは巧みなりとも、其譚ものがたりは奇なりといふとも之れを小説とはいふべからず。(中略)されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて我が假作つくりりたる人物なりとも、一度篇中にいでたる以上は、之れを活世界の人と見做して、其感情を寫しいだすに、敢ておのれの意匠をもて善惡邪正の情感を作り設たてることをばなさず、只傍觀してありのままに模寫する心得にてあるべきなり。」

封建的觀念をしりぞけるためには、このような寫實主義の主張は大きな支柱としてはたらくことができる。「彼の勸懲をもて主眼とせる和漢の小説作者」と逍遙によつて呼ばれる舊時代の作家たちが、

「斯かる情は此人物にふさはしからず、さる情慾をいだかせなば此人物の價を損ぜん、如かず聖人君子

に恥ざる立派の人物になしおくべしなど、作者が岡目の手細工もて人の感情を折衷なし、勸懲といふ人の爲の模倣へ造化の作用をはめこむときには、其人情と世態とは已に天然のものにあらず、作者がみづから製作へたる詭へ向きの人情なるから、其人物を除くの外には決して見がたき人情なるべし。」

と批判されるのはまちがつていない。そしてその批判からありのままの「人情」の寫實を主張する逍遙の態度は、「人情」の眞實こそ描くに値いするとするもので、この限りでは、人間の現實に密着して行こうとする近代文學の一つの著しい性格がとにかくここに差出されているということが出来る。封建社會においては、ように支配層から與えられた觀念によつて現實を見るのではなく、自分の眼でありのままを見て、すべてをそこからはじめて行こうとする。したがつて與えられた規範的な觀念をただ信じてしまう前に、人間の實生活においてはどのような意味をその觀念がもつかをまず實際的に検討することが必要であるとするとする態度。寫實主義は本來このような資格において近代文學の方法たるのが必然となるのであるが、逍遙は寫實主義の提唱において右のようなものに形の上では近づき得たのであつた。しかし、それが形の上のものに過ぎなかつたことは、右のようなものとしての寫實主義から當然生れて來べき人生批判への要望や自覺的態度が逍遙には見出されず、たまたま「小説神髓」中に次のような文章を讀むことは出來てもそれは翻譯であり、その翻譯の部分は逍遙自身によつて何ら内容的に發展させられていないのであつた。

「なべて文學の主目的は人生の批判をなさむが爲のみと往古の識者はいひけり。小説はもと文壇の一大美技とも稱ふべきに、却つて屢々踐められて最下に其位置を占るものは、また何故ぞや。想ふに、人生の批判と見るべき小説稀なるに因ることなるべし。」

これは逍遙の所謂「英國の博識」であるところの「如ン茂ルレイ」(ジョン・モーレイ)のことばだが、このような言葉を逍遙自身の言葉としてはわたしたちは聞くことができなかった。そしてそれは當時の作家について言えばひとり二葉亭四迷からのみ期待し得る言葉に過ぎなかつた。——逍遙の關心は寫實主義の批判性に向つて深められる代りに寫實主義の技術的側面の追及の中に「詳細化」されて行く。この側面での「小説神髓」の努力は、特筆すべきものとして本間の文學史などではわざわざ「寫實主義の提唱」という一項目を設けてほめ上げることになつているが、寫實主義を單なる技術的側面においてのみ問題とすることができないことはいうをまつまい。

なお「小説神髓」が、近代社會に最もふさわしい文藝ジャンルとしての小説を極力押し出そうとしていることも忘れることはできない。文學的方法としての寫實主義はそれに最もふさわしい文藝ジャンルとして小説と深く結びついて行くのが近代文學の必然的な過程であつて、そうした結びつきの内的な必然性は、逍遙によつてどれほど自覺的にとらえられていなかつたけれども、小説を正面に押し出したことは、とにかく「小説神髓」の注目すべき點の一つと言われねばならない。……

四

以上、「小説神髓」について述べて来たところを概括するならば、逍遙はここでは、封建的觀念をしりぞけてその支配下にあつた文學を形式的ながらもかく自立的なものたらしめようとして文學觀の變革を支度